

海邊の瞑想 : 文苑

著者	芒村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	102
ページ	29-36
発行年	1903-11-25
その他の言語のタイトル	海邊の瞑想 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5623

の泡沫の如く、河畔の夕虹の如し。而も人間何なればかく消れやすき幻影を慕ひて自ら戦はざるべからざるか。あゝ我はもはや多くを云はざらむ、吾は戦ふことが人生の運命なることを今にして悟り得ぬ。基督も戦ひぬ。而して彼は十字築上に死したりき。釋迦も戦ひぬ、而して彼は鶴の林に死したりき。あゝ戦ひなるかな、戦ひなるかな。友よ、われはもはやこれより多くを云ふこと能はざる也。たゞ世の激浪にたへずして一人寂しき故國の天地に人となりても運命は至るところに襲ひ來るを如何にせん。さらばわれ戦はん、かくて人の世の戦ひつきて永劫の眠りにつかん時、墳墓の上には春風の吹くうむか、あゝわれまた何をか云はんや。

(完)

海邊の瞑想

芒

村

雲は深々として岫を出で、風は蕭々として衣を吹く、ふはひとせ、秋風ふき起る頃海濱にありたる一週間の記事なり。吾句かなき筆吾たくみなき想の、如何にして其間に享けたるかぐさめさ、其間にみたる自然のなつかしき色をうつし得んや、只筆さつて人にまみらんまでのすさひ多。

〔一〕

露零珊々として松が根の小草にかさり、殘月ほのかに雲の彼方にかくれんとす。あゝなつかしきは

海邊の曙なる哉。昇り来る朝日の色美はしく、雲と水とは幾度か變幻しつ。朝けふり立ちこめたる磯馴の伏屋より一羽の鳩、はたきの音幽かに、つめたき曲浦の狹霧に隠れたり。傍へに立てる椈の木は橄欖の木にもたぐふ可く、吾はそゞろロトの昔を忍びて幽かなるはるゑみをもらしつ。

橄欖の葉をつひばみて

空かけりゆく白鳩の

影きよらかに世は明けて

あゝ曙となりにけり――

〔二〕

あゝうるはしくなつかしきはこの濱邊なるかな、水はみどり深くどこしなへにたゞへ、山の紫色の色濃くとは動かす。白沙遠く連なるところには浮鷗の夢あたゝかに磯千鳥のしば鳴く聲は限りなき曲浦の閑寂を破る。こゝは彼のみどり野の草深くして、幽かにはふ早百合の花のごとく、人に知られざれど吾は満身の愛をこの一帯の濱邊に灑ぐ。

吾こゝに來りて二日目の夕暮なりき、夕風わたる蕎麥畑の畔を過ぎて磯邊に出でたるとき、吾は目前にかがやく奇異の現象におどろきぬ。日はまさに虞淵に沈まんとして芙蓉峯は濃紫色に彩り大空に一種の色あり光あり、彩光のうちには靈あり韻ありりて吾に迫るをおほへ、海は天を蘸して燃ゆるがごとく輝くがごとく。はたまた烈しき戦闘のごとし、已にして日全く没し戦闘全く終り、海面俄に闇をこめて蒼々茫茫、只さきに芙蓉峯のかがやけるあたり、ゆふづとの光燦爛たるを見たりき。

まはるひとり、小春日の暖かき日光に落しつゝ、濱邊の松林を漫歩し、知らず／＼奥深く分け入りぬ。入るに従つて松樹漸く盡きて、雜木の林となり、搖落の聲何時かすぎけん、櫛の葉の紅葉せる殊にさびしく、寂々たる落葉を踏み行けば秋の日の黄色に枯枝を透して來る、水涸れたる小溝をすぎて益々深く進みしとき、吾は落葉の中、一段高き處に一圍の墳域を見出だしぬ、吾心は一の情想に充たされて涙のはら／＼と頬を下るを覺へたり也。

Beneath those rugged elms, that yew-tree's shade,

Where heaves the turf in many a mouldering heap,

Each in his narrow cell forever laid,

The rude fare fathers of the hamlet sleep.

The breezy call of incense-breathing morn

The swallow twittering from the straw-built shed,

The cock's shrill clarion, or the echoing horn,

No more shall rouse them from their lowly bed.

For them no more the blazing hearth shall burn,

Or busy housewife ply her evening care;

No children run to lisp their sire's return,

Or climb his knees the envied kiss to share.

かくて思ひにふける事多時、落葉頻りに頬を打つにこのさびしき境を出でぬ。あゝ月白き夕、霜深き朝、逝きけん人の心や如何に。

〔三〕

吾何故にこゝの海邊に來りし乎。

吾は都の秋に逢ひて煩悶と憂愁とに堪へざりし也、誘惑の悪魔は頻りに吾を誘はんとし、吾愛する友は已に此世に在らざりき、即ち數日の暇を乞はればこゝの海べにさすらひ、しばし黙思の時を費して、なぐさめの甘き木蔭は息はんとしたるなり。

あゝ果して世人交結須黄金、黄金不多交不深、歎誠に然り。若しさあらざりしならんには陶潜に歸去來辞無く、屈原は汨羅に沈まざりしならん。若し世人にして温情中にみち、愛外に溢れしめば古今を通じて世上幾多の悲劇、幾多の暗涙は無かりしならんも。こは吾が前の歎きなりき、されど一度眼を放つて宇宙の大自然を望むに及びて吾は自然に友を得たりき。嗚呼其偉大崇美なる景致正に何を以てか之に比ふべき、吾心この自然に一致して始めて偉大、崇美を期するを得べし。吾今や紛々たる煩悶を退け、憂愁をすて、眞に光明の途に入らんとす、されど「吾はシャロンの野花谷の百合なり、わが愛するものゝ男子等の中にあるは林の中に林檎のあるがごとし」あゝ眞の友あらば如何に嬉しかる可き。

〔四〕

吾目前には無限の深淵ありて誘惑の波とはに湧き返り、今しもくづれんとする斷崖は主宰者が鞭の

上るをまちて、迷へる人の上に倒れかゝらんとす。この時吾心は今しくつねんとする崖の前に俯み、虎狼の洞穴に入りたるがとき悲しき恐怖に充たされぬ。吾はふりかゝる誘惑をはらみ除けて「吾友よ」と叫びつゝ走せゆきたるは、小き人影の、幽かにゆくてにどぼくどたとどりゆくを見たる時なりき。吾が碎けたる胸には新しき力の湧き出でたるを覺へ、「友よく」と叫びつゝ彼の影に近づきぬ。されどそは友ならざりき、ろは只管空想にふける偽りの子なりき。

吾は失望したり。されど又かすかに豆の如き姿のはるかに歩みゆくを見たるとき、希望はふたゝび胸に湧きて、やがて追ひ付きたるに、あゝこは一人の偽善者にすぎざりき。吾は危くも彼が詭辨にまどはされて正義の路をすてんとせり。

吾はつぶやきぬ「吾に友なき歎」されど心をとりなほしてすゝみゆけるに、更にゆくてに光の如き一人の影を見る。急ぎ追ひつきて友よと云ひしとき彼はふりかへりぬ、彼の眼はやさしき愛をたゞへ其が額にはいとたふとき真理の影を宿したり。これ誠に吾友にて又吾師なりき、かゝる吾等は二人互に相携へてあやふき小徑をすゝみ行きけるに。魔群は吾等をまどはさんとして笑ひのゝじり、頻りに迫害を加ゑんとす。されど吾等の心にはたのしきよろこびみちみちてなほもすゝみゆきぬ。されど悲しい哉友が魂は早く永劫の郷にかへりぬ。吾目には限りなき涙あふれて薄闇の大空を仰きたるに一道の光明赫々としてかゝりき。聖使の群れ吾友を圍繞して蒼穹高く昇りゆくを見たりき。吾は手を舉げて「何故に吾を伴はざる」と叫べば大空に聲ありて「汝は只正義の道をすゝみゆべ。光は闇にはらまれたるを慰へ」とひびき來りぬ。

吾は今形影相吊ひ正しき道をたどりゆくなり、されど見ずや、吾のゆくてには處々にたのしき場所ありて水は蜜のごとくに流れ、葡萄はうるはしくみのれり、こゝに限りなき休息と慰藉とをわつゝ、吾はひとりこの小徑を辿りてある也。

〔五〕

一日夕陽に對す、大空のたゞすまゐる、水の變幻何にたくらぶべき、かくて吾は海邊の流木に坐し「大聖の入滅」に似たる景色にむかひ。しばし默思の境に入りぬ。

あゝ人類の目的は果して那邊に存す可きか、所謂功名とは何ぞ、富貴とは何ぞ。只其終極に於て過去の經歷をかへりみ仰いて天にはぢす俯して地に耻ぢず、公明正大、天真爛漫、其餘光のかゞやく事この落陽のごとくならば又うらみなからずや。

已にして夕潮漲り來り。雲影次第におとろへ、日影はやゝかに薄光も今はうすれんとし、海面遠くより闇こめて浦ふく風いとゞつめたかりき。

〔六〕

半夜燈を檠つてガ―Fairiesの傳をよむ。吾これをよむこと已に幾回なるを知らず、而も之を讀む毎に新たなる希望勃々として湧き、宛もこの偉人に接するが如き感なくんば非なるなり。彼が若き時は實にあはれる煩悶の子なりし也、彼は幾度か業を易へて幾度か失敗し遂に慈母の手を遠くはなれて汝々としてつとめ、又も失敗したり、あはれるなジエームスは病をさへ得て勞働に堪へず、一夜漂然として故郷に入りぬ。失意の子が姿如何にやつれけん、彼の目には恐らく熱涙のあふれた

るならん。かくてつかれ果てたる彼は深夜いともなつかしき吾家の前に立ちたり、此時彼の慈母は今や夜業を終り寒燈の下に静かにジエームスの爲めにいのりてありき。この瞬時彼の胸に潜みたる敬虔の念は油然として起り彼の人格、彼の大同情を成したり。あゝ滔々として濁れる世に一片巖固たる敬虔の念また尊むべきにあらずや。

〔七〕

あゝ今日吾はこの濱邊に別れんとす。七日の瞑想果して何をかゑたる、今や吾胸に確乎たる信念おこり、勃乎たる希望あふる、失望の影何處ぞ、煩悶の影何處ぞ。自然は常に吾が友たり。秋風起る秋風おこる吾勇ましく濁世に抗して正義の戦をたゝかわん哉。今朝「曙のうた」成る。

橄欖の葉をつひばみて

空かけりゆく白鳩の

影聖からに夜は明けて

あゝ曙となりにけり。

み空の色をながめては

罪ある胸もしかすがに

心あらたに氣は清く

夜曙となりにけり。

あゝ頌へずや花やかに

くらきをつゝみ闇をおひ

明けゆく空のおち方に

そこにはほゝりのぞみあり。

新體詩

ちかひの虹

けにおさな子の胸にこそ

さかしき敵をはらふべき

力の基わひろむなれ

さらば若きに立ちかへり

憂愁うれひを知らぬ身となりて

兜に百合をかざくすや

内田夕蘭

甘き葡萄の雫だに

にかしと心くるひては

無明の野べにうかびたる

紅あやいろぬ清きうるはしき

彩色あやいろあけの雲を見て

妖魔まよはしの火を叫ぶらむ